

2016年3月19日

企画委員会

第7回「私の主張の会」が開催されましたので、概要をご報告します。当日は当学会が継続的に発信しております「社会への提言」の現在の検討テーマであります、「企業におけるIS人材の育成方法」に関しますパブリックコメントをお伺いする目的で開催されました。参加者は9名で、2時間に渡り様々なご意見が寄せられました。当日のご参加者からのコメントは、「社会への提言」に反映させていく予定です。

### 第7回「私の主張の会」概要について

1. 開催日時 2016年2月23日(火) 18:00~20:00
2. 開催場所 専修大学神田キャンパス 7号館 772教室
3. 当日のテーマ  
「企業におけるIS人材の育成方法」
4. 寄せられたコメントの概要(抜粋)
  - ① 提言が主張する「情報システムプロデューサー」と既存のITコーディネーターとの違いを明確にしておく必要がある。ITコーディネーターが社外の人間であり「いかにして情報システムを構築するか」を役割とするのに対して、情報システムプロデューサーは社内の人間であり「何を情報システム化するかを考える」ことに重きをおく違いがある。
  - ② 提言の中でトヨタの車種別主査制度が事例としてあげられているが、情報システムについては自動車の車種のような大きな括りばかりではない点を考慮しておく必要がある。
  - ③ 「情報システムプロデューサー」の上司は事業部長、サブラインの上司は全社のCIOとなるマトリックス組織が想定される。
  - ④ 利用者から見た情報システムのサイクルと、構築側から見たITのサイクルは区別して考えるべき。ITはユーザから隠蔽することが理想である。ただし隠蔽されたITの品質を保証するための人材確保は必要である。
  - ⑤ 米国では社内にビジネスアナリストがおり、情報システム化についても最後まで責任を持って見ている。日本にも必要だと考える。
  - ⑥ 「情報システムプロデューサー」を生かすには、ユーザの事業部長がその役割を正しく理解しておく必要がある。
  - ⑦ 「情報システムプロデューサー」の一番の候補者は、ユーザ企業の情報システム部門の優秀な人材である。社外の人間は運用に弱い。
  - ⑧ 人材育成には他社事例から学べる講座やユーザ企業交流の場が必要。

- ⑨ 「情報システムプロデューサー」に求めるスキルは多様だが、「仕組みのコンセプト作りと設計スキル」がメインとなる。
- ⑩ 「情報システムプロデューサー」などの IS 人材の流動化（会社間での異動）は必要となる。（米国の様に）
- ⑪ IS 部門をプロフィットセンターとすることで、人の評価も高めていくことができる。
- ⑫ 「情報システムプロデューサー」には倫理観の教育も欠かせないが、大学や大学院などの場で、OB も含めて教育を行うと良い。

以上

（作成者：甲斐莊正晃）